

仏事を学ぶ 第八回



お経の意味⑤

今回より、当寺においても通夜の際などによくお唱えしている『修証義』についてご一緒に学んでまいりましょう。『修証義』は、おもに道元禅師の著わされた『正法眼蔵』から、その文言を抜き出して編集されたものです。曹洞宗の宗旨は、お釈迦さまから歴代にわたって正しく受け継がれてきた以心伝心の正伝の仏法、只管打坐（ただひたすらに坐る）、即心是仏（心がそのまま仏である）の心を標榜する教えです。『修証義』は、このような心を日常生活のなかでどう実践し、信仰生活を高めていくかを示しています。

【修証義各章とその大まかな意味】

○第一章 「総序」

生死の意味を問うこと、無常を観ずること、因果の道理を弁えることが仏教徒にとって重要である。

○第二章 「懺悔滅罪」

懺悔によって清浄なる心境に至ることが仏教徒としての自覚ある生活の入り口となる。

○第三章 「受戒入位」

仏・法・僧（僧伽＝サンガ）を敬い奉り、戒（いましめ）を授かり、それに則った生活を送ることを誓うことにより、み仏の位に入り、仏弟子となることができる。

○第四章 「初願利生」

誓願を立て、菩提心を起こして修行を怠ることなく、それを衆生のために回向して、利益することが説かれる。その実践法として「布施」「愛語」「利行」「同事」が例示されている。

○第五章 「行持報恩」

日々の行持（修行の持続）がそのまま仏祖への報恩であるという

依りて悪の報を感得せざるには非ず。

【現代語訳】

自己の生きている意味を明かし、死・命とは何かに決着を付けることは仏教徒にとって二つとない大切な修行の縁です。現実の生き死にのなかに仏の真理があるから、生き死にを選び好みまする事はありません。損得抜きにこの生き死にの事実にご都合を差し挟むことなく、静寂な悟りの場であると得心して苦しみの生き死にとして逃げ出そうとしてはいけません。かと言って、この人生がそのまま悟りだと言って、喜んでおぼれてもいけません。その腹が決まった時、はじめて生死と言うこだわりを離れて、その人なりのよき人生になります。ただ唯掛け替えのない縁として腹を据えていきたいものであります。

私と言う人の身をいただいた事は真に不思議です。仏の教えに遇う事ができたのも不思議としか言えません。今私たちは、自分では理解できない積もれる恵みに助けられて、すでに有り難い私と言う命を頂いたばかりか、難値難遇な仏の真理に出会わせていただいているのです。生き死にには色々あるでしょうが、今の命が最善であり素晴らしい人生なのです。尊く、よりよいのちを虚しく過ごして、露のようにはかない命を無常の風にゆだねてしまつてはならないのです。命のはかなさは頼りになりません。自分には分からないのが露のような命なのです。いっどこの道の草に落ちないとも限らないのです。自分の命さえ私の思いど通りにはならないのです。ましてや命は時の流れに流されて一時も止まる事はないのです。青年の光輝く顔せもいつしか面影を失い、いくら探しても跡形もありません。よくよく考えてみると、過ぎ去った時間は二度と戻らないのです。はかなさはアツと言う間にやっできて、権力者も、政治力でも、親戚友人でも、忠実な部下も、妻や子も、財産も助ける事はできません。ただ一人きりで黄泉の国に行くだけです。自分について行くのはただ心でなした善と悪

こと。日常の様々な動作が仏法にかなえば、それがそのまま仏祖への報恩になると説かれる。

【修証義第一章総序原文】

生を明らめ死を明らむるは仏家一大事の因縁なり、生死の中に仏あれば生死なし、但生死即ち涅槃と心得て、生死として厭うべきもなく、涅槃として欣うべきもなし、是時初めて生死を離るる分あり、唯一大事因縁と究尽すべし。

人身得ること難し、仏法値うこと希れなり、今我等宿善の助くるに依りて已に受け難き人身を受けたるのみに非ず遇い難き仏法に値い奉れり、生死の中の善生、最勝の生なるべし、最勝の善身を徒らにして露命を無常の風に任すること勿れ。

無常憑み難し、知らず露命いかなる道の草にか落ちん、身已に私に非ず、命は光陰に移されて暫くも停め難し、紅顔いづくへか去りにし、尋ねんとするに蹤跡なし、熟観する所に往時の再び逢うべからざる多し、無常忽ちに到るときは国王大臣親昵従僕妻子珍宝たすくる無し、唯独り黄泉に趣くのみなり、己れに随い行くは只是れ善悪業等のみなり。

今の世に因果を知らず業報を明らめず、三世を知らず善悪を弁えざる邪見の党侶には群すべからず、大凡因果の道理歴然として私なし、造悪の者は墮ち修善の者は陞る、毫釐もたがわざるなり、若し因果亡じて虚しからんが如きは、諸仏の出世あるべからず、祖師の西来あるべからず。

善悪の報に三時あり、一者順現報受、二者順次生受、三者順後次受、これを三時という、仏祖の道を修習するには、其の最初よりこの三時の業報の理を効い験らむるなり、爾あらざれば多く錯りて邪見に墮つるなり。但邪見に墮つるのみに非ず、悪道に墮ちて長時の苦を受く。当に知るべし今生の我身二つ無し、三つ無し、徒らに邪見に墮ちて虚しく悪業を感得せん惜からざらめや、悪を造りながら悪に非ずと思ひ、悪の報あるべからずと邪思惟するに

の行為と習慣だけなのです。

人間としてこの人生において、心と行為が因となり果となつて今の自分を作っている縁起の理を知らず、心と習慣のしがらみと責任を形成している事に気が付かず、過去の縁を背負い未来に種蒔く現在の重い意味をさとらず、善と悪とを見分ける心の力を持たない間違つた考え方の人々と仲間になつてはいけません。根本的に言つて心と行為の縁起の理は明確でごまかしようがないのです。心を汚す悪しき行為をする人は闇におち、善を行う人は明るい世界に上るでしょう。それは毛筋程もごまかしようはありません。もしも心と行為の縁起の理がなかったならば、仏方がこの人間世界に現れて迷いを救うと言う縁も、達磨大師が西から来て迷いの人に悟りを伝える意義も成り立たないでしょう。

私自身の善や悪の行いとその習慣の影響力は三つの時間差があり、一番は今の行為にすぐ反応が表れ、二番には行いの影響はしばらくして、あるいは次の時代に表れ、三番にははるか後に、忘れた頃に表れます。これを行為の影響の三つの時間差というのです。仏と祖師の悟りの道を学習修行するためには、初めからこの三段階の影響力の道理を学び実践するべきです。そうしないと大抵の人は道を間違えて、縁起の理を否定する間違つた見解に陥るのです。間違つた思想に落ちるばかりではなく、悪を悪と思わないという悪の道に陥つて、長い間愚かさや苦しみを受けるのです。それゆえに知るべきです。この人生の自分の命はたった一つで、掛け替えがないのです。無闇に因果を否定する間違つた教えに陥つて、むなしく悪しき行為の影響に染まるべきではありません。惜しむべきです。過ちを作りながら、過ちでないと思い上がり、汚れた行為の影響力を否定して、よこしまな考え方にこだわり、その間違つた行為の影響力に染まるべきではありません。

☆次号より第二章以降について解説をいたします。
※参考：『傍訳修証義』（著：中野東禅）